

## メルロ＝ポンティにおける「他者の問題」について

石 井 達 也

### 序

他者経験とは何か。我々は生まれたときから他者に囲まれ、他者の間で成長し、他者とともに生を営む存在である。私は他者と言葉や眼差しを交わし、他者に共感し、他者を愛する。こうした日常的な生において他者の存在が私にとって自明なものである理由は、他者が私と同じ人間であるという意味での同質性を持つという点にあると言えよう。だが、他者が私と同質な存在であるという側面しか持たないのであれば、そもそも他者の問題が問題として生じることなどないであらう。他者が私とともにこの世界で生を営む存在でありながらも、同質性のみならず、私ではないという意味での異質性をも併せ持つからこそ、

他者経験への問いが立てられることになるのである。

それでは、メルロ＝ポンティにおける「他者の問題」(e-probleme d'autrui)とは何か。それは、私の意識と他者の意識との交流の根拠、言い換えれば意識の複数性が成立するための根拠を明らかにし、自我論を論駁することであった。そのようなメルロ＝ポンティの他者論において、幼児における対人関係は特別な意義を持つている。彼が幼児の問題をとりわけ主題的に論じているのは、児童心理学および教育学の教授を務めていたソルボンヌ大学での講義(一九四九―五二)においてである。だが、幼児の問題は単に大学での職務上の必要性から取り上げられたのではない。実際、彼は「行動の構造」や「知覚の現象学」といった前期の著書から、晩年の遺稿「見えるものと見えないもの」に至るまで、幼児の他者との関係に言及し続けてい

る。この事實は、幼児の対人関係のあり方が彼の他者論における発想の根源になっているということを裏付けている。

したがって我々としても、幼児の対人関係のモデルを単なる心理学的な成果にすぎないと軽視してメルロ・ポンティの他者論を考察するわけにはゆかない。彼の他者論の意義と問題点を内在的に抽出するためにも、まずは彼の立場から出発する必要があるからである。そこで本稿ではまず、幼児の対人関係を端的に表す「癒合性」という概念に着目し、幼児の他者との関係を検討する。続いて、成人の生においても人称的な自我以前の匿名的な知覚的意識が基盤となっているという彼の主張を取り上げ、その妥当性を問う。その結果我々は、癒合性や匿名性といった概念によつては意識の複数性は証明し得ないということを見出し、「生きられた独我論」(solipsisme vécu)の真理性に直面することになる。結局メルロ・ポンティ自身は独我論的狀況を特殊な事例とみなしてそれを他者との交流に再び回収しようとするが、我々はそのようなメルロ・ポンティに対して批判的な立場を取る。そして我々は本論文の最後で、私にとつて他者が異質性を有する存在であることの根拠を、晩年のメルロ・ポンティが肉の存在論を練り上げてゆく上で不可欠の事例であったと言える再帰的触覚経験に見出す。すなわち他者の不可知性の根拠は、私が私に触れることの不可能性と類比的であるという結論が導かれる。

## 一 癒 合 性

メルロ・ポンティの他者論において、幼児の他者との関係は単なる心理学的な事実として看過されるべきものではなく、絶えず対人関係の重要なモデルとして考えられているということ、例えば「見えるものと見えないもの」における以下の記述からも明らかに見て取れる。

「幼児は思考する以前に知覚し、彼は自分の夢想を事物に、自分の考えを他者に移し込み、各人のバースティックティウがまだ区別されていないいわば一塊りの共通の生を彼らとともに形成しているが、こうした発生の事實は、内在的分析の要求という名において、哲学が簡単に無視してしまえるものではない」(VI 27)。

では、なぜ幼児の対人関係を考察することがそれほど重要であると言えるのだろうか。それは、一般に幼児が、他者の心は私には近づき得ないものであるなどとは決して思わないからである。すなわち、「心理現象はただ一人にとつてしか理解できず、私の心理現象は私にとつてしか理解できず、外部からは見ることができない」(PC 175-176)という考えは、メルロ・ポンティによれば「根本的な偏見」(bias)に他ならないのである。こうした偏見を断ち切るためにも、幼児の他者との関係を

記述することが彼にとってでは是非とも必要だったのである。

ここで幼児とは、自己意識に目覚める以前の子供のことを指している。心理学者のアンリ・ワロンによれば、自己意識は本質的なものでも原初的なものでもなく、「幼児が他者とは異なる主体として振舞ったり自己認識したりするのは、ようやく三歳以降のことである」。そしてこうした三歳以前の幼児は「癒合性」(le syncrétisme)<sup>(2)</sup>のうちに生きていると言われている。メルロ＝ポンティによれば癒合性とは、「我々にとつて共通なある状況の中で混じり合い、私と他者とが未分化であること」(PC 180)である。

すなわち、幼児は自我というものをいまだ獲得しておらず、私を私として意識することがない。私を私として意識するとは、私を他者ではないものとして意識するということだからである。つまり、自己意識に目覚めるためには、私ではない他者を媒介とすることが必要である。逆に、他者を他者として意識することは、他者を私ではないものとして意識するということである。つまり、他者を他者として意識するためには、自己意識が前提とされていないなければならない。

それゆえ、私を私として意識することと、他者を他者として意識することは、いわば表裏一体の関係にあると言える。幼児が癒合性のうちに生きていくということは、このどちらの意識をも彼が有していないということ意味する。したがって、他者が意識を持った主体であることをいかにして認識し得るか

という意味での他我問題は、自己意識が覚醒する以前の幼児において、そもそも問題とはなり得ないのである。言い換えれば、幼児は私をも他者をも閉ざされた主観性として認めてはいないのであり、自我と他我の相剋という事態は起こり得ないのである。

メルロ＝ポンティは、まさにその点にこそ注目する。つまり、他我問題などというものが問題として生じ得ない幼児の意識のあり方に目を向けるのである。だが、自我も他我も区別していない幼児は、果たして他者とコミュニケーションを取り結んでいると言えるのだろうか。「交流が成立するためには、交流する者と、彼が交流する相手との間に明瞭な区別がなければならぬ」(PC 179)と一応は言うこともできよう。とはいえ問題は、むしろ幼児が他者とのように意思疎通しているかということにある。幼児が現実には他者と関わり合っている以上、そこにも何らかの意思疎通が成立しているに違いないからである。

「だが原初的には、他者の志向が私の身体を通して作用し、私の志向が他者の身体を通して作用するという前コミュニケーション、(マックス・シェーラー)という状況が存在する」(PC 179)。

我々成人が通常コミュニケーションと呼んでいるものよりもより以前のものとして、幼児には「前コミュニケーション」とでも呼ぶべき他者との意思疎通が存在しているとメルロ＝ポン

ティは言う。その段階においては、個人と向かい合った個人があるのではなく、匿名の集団、つまり自他の区別のない複数の人々の生があるのである (*ibid.*)。こうした原初の共同性を基盤としつつ、鏡像の習得による自己の身体の客観化、言語の習得などによって、幼児は自己を他者から区別できるようになる、というわけである。

では、幼児における鏡像の習得とは、より具体的にはどのような事態であるのか。我々は自己の手や足ならば見ることができ、自己の身体の全体を見ることは決してできない。唯一鏡像だけが、完全な視覚的資料である (PC 203)。幼児において、鏡像の理解の本質は、鏡の中にあるこの視覚的な外観を彼自身のもと認めることにある。鏡の中に彼の像を認めることは、彼にとっては、彼自身の光景があり得るということを学ぶことである。鏡の中の像によって、彼は彼自身の観客になり得る。鏡像の習得によって幼児は、彼が彼にとっても他者にとっても見えるものだということに気づくのである (PC 202)。

そしてまた、「自」の鏡像は、自「認識」(la connaissance de soi) を可能にすると同時に、「一種の自己疎外」(une sorte d'aliénation) をも可能にする」(PC 203)。つまり、私は鏡像によって他者のパースペクティブというものがあつたことを理解し、他者とは区別されたものとして自己を認識するとともに、私は自分の存在を直接的に感じていた私ではもはやなく、私とはいまや鏡が私に与える私のこの像であるということとを認識させ

られるという意味で、直接的な自己から想像的な自己への疎外をも経験すると言えるのである。したがって、ここでの疎外とは自己を他者のパースペクティブによって「脱中心化」(décentration) することである。

けれども結局のところ、メルロ＝ポンティの言うコミュニケーションとは、このように自己と他者とを区別するようになった成人においてさえも、やはり匿名的な癒合性を基盤として成り立つものとして考えられていることは疑い得ない。

「癒合的社会性はおそらく三歳になっても清算されない。他者との不可分の状況、我々が一体となった状況の中での他者と私とのこの相互侵蝕(……)は、成人の生活においてもなお見出される」(PC 226-227)。

この引用からも明らかであるように、メルロ＝ポンティは幼児の対人関係と成人の対人関係との間の明確な断絶を認めていないのである。そして、そうした発想はすでに「知覚の現象学」の時期から彼が手にしていたものであるということは、以下の記述によって明らかである。

「もし成人にとつても唯一の間主観的世界がなければならぬのだとしたら、一歳時の未開の思考が、成人の思考の下に必要不可欠な獲得物として存続しているに違いない」(pp. 408)。

では、幼児と成人の他者経験の連続性の根拠はどこにあるのか。それは、匿名的な行為としての知覚のあり方にあると考えられる。つまり、幼児が成長の過程で知的な思考を獲得してゆくことによって、自他未分化な前コミュニケーションという段階は乗り越えられてゆくが、知的な思考以前に営まれている我々の知覚のあり方は幼児と成人との間で本質的な差異はなく、他者知覚という意味での他者経験は幼児から成人へと成長しても連続性を保っていると考えることができるのである。それゆえ次節では、幼児の対人関係における適合性という概念に呼応する、知覚的意識の匿名性というメルロ＝ポンティの主張を検証してゆくことにしよう。

## 二 匿名性

メルロ＝ポンティによれば、知覚とは「人称的な」(personnel)行為ではなく、「非人称的な」(impersonnel)あるいは「匿名的な」(anonyme)行為である。すなわち、「あらゆる知覚は一般性の寡聞気のなかで行われ、匿名のものとして与えられる」(PP 249)と云うのである。あるいは、「もし知覚的経験を正確に翻訳してみようとするならば、私は、ひと(ou)が私において知覚するのであって私が知覚するのではない、とでも言わねばならなくなるだろう」(ibid.)とも述べられている。これは一体、どのような事態を指しているのか。そしてその根

拠はどこにあるのだろうか。やや長くなるがメルロ＝ポンティ自身の説明に耳を傾けたい。

「感覚を通じて、私は私の人称的な生や私の本来の行為のまわりに、それらが現れ出るための基盤として働いている、ある与えられた意識の生、すなわち私の目や、私の手や、私の耳の生活——これらは同じ数だけの自然的自我(Moi naturel)なのだ——を捉える。私がある感覚を体験するたびに、私はその感覚が私の本来の存在(mon être propre)、つまり私がそれに対して責任を持ち、私がそれを決断するところの存在に関わるのではなく、すでに世界に加担しているもう一つの私(un autre moi)に関わっているのを体験するのである」(PP 250)。

ここにおいて、彼は人称的自我と自然的自我という区別を導入している。すなわち、知的意識においては私(c)という自己意識が伴うが、知覚的意識においては自己意識は登場せず、非人称的な匿名性(c)という意識の様態であると主張するのである。知覚において我々の意識は受動的であるが、思考や判断といった知的な営為における我々の意識はむしろ能動的であるという事実を鑑みれば、なるほどこのような区別はそれほど不自然なものではない。そしてこのような区別を、自己意識を獲得した後の成人が、知覚経験において自己意識以前の幼児期の匿名的な意識様態を取り戻すという事態に対応させ

て考えることは十分可能であるだろう。こうした思考以前の知覚的な意識のあり方を根源的なものとみなすのが、メルロ＝ポンティの他者論においても重要な役割を果たしており、それが他者の意識に出会うために不可欠であると考えられている。また、彼のこうした立場は、前期から後期に至るまで一貫している。実際、「見えるものと見えないもの」の研究ノートにおいて、「前―自我論、癒合性、不可分性、転移を記述すること」(VI 270)と書かれており、自己意識以前のあり方における他者との癒合的で不可分な関係に、彼が他者問題の解決の糸口を求め続けていたことが伺える。

しかし、癒合性のうちに生きている幼児のみならず、成人もまた匿名的な知覚的意識において他者の意識と共存しているのだと考えれば、果たして問題のすべてが解決されるのだろうか。この点については、メルロ＝ポンティ自身「知覚の現象学」の中で以下のように自問している。

「だが、こうして我々が手に入れるのは、果たして他者なのだろうか。我々は結局のところ、複数者の経験の中に我々 (le Je) と汝 (le Tu) とを水平化し、主観性の中心に非人称的なもの (l'impersonnel) を導入し、諸観点の個性性 (l'individualité des perspectives) を消去しているが、こうした漠然とした混同の中で、我々は自我 (l'Ego) とともに他我 (l'alter Ego) をも消失させてしまったのではなから

るか」(PP. 408)。

そもそも問題は、私が他者を経験すること、他者の意識と出会うことにあったはずである。にもかかわらず、主体の基盤として匿名性が働いていると主張することによって、私自身が匿名であるなら、私が知覚している他者もまた匿名であるということになってしまい、そこに見出されるのは単なる非人称的な集合意識であって、自我と他我という複数の意識ではないという結論が導かれることになる。こうして彼は、いまや「私」と他者の相対は、単に我々が他者を思惟しようとするときにのみ始まるものでもなければ、その思惟を非定立的意識や非反省的生に再統合すれば解消するといったものでもない」(PP. 408)ということを確認するに至るのである。

こうして、幼児の対人関係における癒合性という概念によっても、知覚的意識の匿名性という発想によっても、自我と他我という意識の複数性を主張することは困難であるということが判明した。それゆえ我々は次節において、メルロ＝ポンティが「生きられた独我論」(le solipsisme vécu) と呼んだ状況を明らかにすることを目指す。

### 三 「生きられた独我論」

「知覚の現象学」における他者論のねらいは独我論を反駁す

ることにあつたが、メルロ＝ポンティはある種の独我論、すなわち彼の言う「生きられた独我論」(solipsisme vécu) という状況が存在することを認めるに至る。「生きられた」(vécu) という形容詞には、メルロ＝ポンティの場合、反省以前の最も根源的なもの、真理の基盤として据えられるべきものというニュアンスが込められている。したがって「生きられた独我論」という表現は、客観的思考以前の非反省的な生活において私が生きている一つの状況、すなわち否認し難い真理としての独我論的状況を意味するものだと言える。それは、私と他者の状況が決して重なり合うことがないという事態を指し示すものである。

「だが結局のところ、他者の行動にしても、さらには他者の言葉でさえも、他者ではない。他者の悲しみや彼の怒りは、彼と私にとってまったく同じ意味を持っているわけでは決してないのである。それは彼にとっては生きられた状況 (des situations vécues) であるが、私にとっては共現前させられた状況 (des situations appréhées) なのである」(PP 409)。

つまり、たとえどれほど私が他者の状況の内に身を置こうとしても、彼が生きている状況と合致し、彼の生そのものを生きることが決してできず、私は私自身の生を生きることしかできないのである。こうした私と他者の状況の不一致は、何らかの方法によって乗り越えられるものではなく、原理的に克服不可

能なものである。それゆえメルロ＝ポンティも、「この自己はあらゆる有効な交流の証人であり、それなしでは交流がそれとして知られることもなく、したがって交流ではなくなるだろうが、この自己が他者の問題のあらゆる解決を禁じているように思われる。そこには乗り越えられぬ生きられた独我論 (solipsisme vécu qui n'est pas dépassable) があるのだ」(PP 411) とはっきり認めている。それは、言い換えれば「格変化することのできない私」(le Je indéclinable)、「疎外され得ない私の主観性」(ma subjectivité inaltérable) の存在を意味する。

しかし、そうだとすれば、このような独我論的状況は決してある特殊な事例においてのみ成立するものではなく、私が生きているあらゆる状況において必然的に成り立っていると云わねばならない。すなわちそれは、メルロ＝ポンティが挙げているような他者への同情 (PP 409) や、双方の愛情が等しくないカッブル (PP 410) といった事例だけに限定されるものではない。つまり我々は「生きられた独我論」の真理性をはっきりと認めなければならぬ。

にもかかわらず、メルロ＝ポンティ自身は「孤独と交流とは二者択一の二項ではなく、ただ一つの現象の二契機である」(PP 412)、「交流の拒否もまた交流の一様体である」(PP 414) と述べることによって、独我論的状況を他者との交流が成立している状況へと回収してしまっているように思われる。そして彼のこうした安易とも言える解決策は、問題の本質を再び隠蔽

すること以外の何ものでもない。「厳密に言つて独我論が真であるのは、何者であることもなく、また何事をも為さずに、暗黙の内におのれの実存を確認することに成功するような人に関してだけであるが、実存するとは世界内に存在することなのであるから、このようなことはまったくあり得ない」(pp. 414-415) という彼の主張は、「生きられた独我論」の真理性を再び否定するものであるとさえ思われる。そこで我々は次節において、メルロ＝ポンティが特にその晩年の思索において繰り返し言及している、私が私に触れるという再帰的な触覚経験の事例を参照することによって、私と他者の間の埋めることのできぬ隔たりを露呈させ、メルロ＝ポンティの他者論への反論を試みたい。

#### 四 再帰的触覚経験と他者との接触

私が右手で左手に触れるとき、私は左手を物理的な事物として、すなわち滑らかさや温かさや柔らかさといった物理的な諸特性を持った事物として感じている。だがまさにそのとき、左手もまた右手を感じ始める。つまり物体としての左手が感じる主体となる。感じる主体から感じられるものへ、感じられるものから感じる主体への転換という、こうした可逆的な関係性が成立するということが、私が私に触れるという再帰的な触覚経験における重要な特質である。メルロ＝ポンティはそのことを

フッサールの「イデーニ」における身体構成論から学んだ。それでは、私が私の身体を見るときはどうか。再帰的な触覚経験と同じように、再帰的な視覚経験というものもあり得るのだろうか。注目すべきはフッサールの以下の言葉である。

「私は自分自身に触れるのと同じような仕方では、自分自身を、自分の身体を見ることはできない。なぜなら、触れられる身体としての私の身体は、触れられながら触れるものでもあるが、見られている身体と私が呼ぶものは、見られつつ見ているものではないからである」。

ここでフッサールは、再帰的触覚経験はあつても再帰的視覚経験というものはあり得ないということをはっきりと述べている。触覚が文字通り距離を持たない接触であるのに対して、視覚は距離を隔てた感覚であることからしても、厳密な意味での再帰的視覚経験というものがあり得ないことは明らかである。

それゆえ、我々は視覚と触覚のこのような差異を無視すべきではない。にもかかわらず晩年のメルロ＝ポンティは両者の差異を重視せず、むしろ両者を同等に扱うことによつて、可逆性としての肉を究極の真理とする「肉の存在論」を構築しようとしていた。だがそうした彼の新たな存在論の是非を論ずることは本稿の直接的な課題ではない。ここでの課題は、再帰的触覚経験と他者経験との関係性を明らかにすることである。



私が他者の身体を見るとき、私にとって他者の身体はあくまでも見られるものである。それと同様に、私が他者の身体に触れるとき、私にとって他者の身体はあくまでも触れられるものである。当たり前のことだが、私が他者になり代わって他者自身の視覚経験や触覚経験を代行することができない以上、視覚によっても触覚によっても、他者は私にとって感じられるものとして与えられるのみであり、決して感じる主体として与えられるのではない。したがって私による他者の身体の知覚においては、視覚と触覚との質的差異は存在しない。なるほど私が他者の身体に触れるという経験は、私の身体が他者によって触れられることでもあると言えるが、それでも私は感じる主体としての他者を感じることはできない。たとえ他者が私によって触れられることによって触れられていると感じているであろうとしても、私にとっては他者の触れられているという感覚は永遠に未知なのである。そしてこうした状況をこそ、メルロ＝ポンティは「生きられた独我論」と呼んだのであって、それは原理的に乗り越えられないものであるのだから、我々が為すべきことはこうした他者の不可知性を解消してしまうことではなく、むしろその意味を見極めることであろう。

「知覚の現象学」においてメルロ＝ポンティは、「いかにして我という語は複数形になり得るのか、いかにして我々は我の一般的観念を形成し得るのか、いかにして私は私のものとは別の我について語り得るのか、いかにして私は他の我が存在するこ

とを知り得るのか」(pp. 400-401)といった問いを立てていた。そして彼は、こうした自らの問いに対して、知的な意識以前の知覚的な意識において私と他者の意識は交流し合うのだと述べることによって問題を解決しようとした。けれども、たとえ知覚の次元における私と他者の意識の交流を主張しても、「生きられた独我論」という状況は解消され得ないのだから、実は問題は決して解決され得ないのである。

それでは、私の意識と他者の意識の交流はあり得ないのだろうか。存在するのは私の意識のみで、他者の意識は存在しないと言うべきだろうか。そうではない。むしろ他者の存在はひとつのパラドクスであって、証明不可能な事柄だと言うべきなのである。他者の存在が証明不可能だということは、それが存在しないということだけをただちに意味するのではない。他者が他我として存在するということは私にとって永遠に謎なのである。そして他我の存在が謎であるということは、他者が他者であることの本質であると言わねばならない。

けれども、謎であるのは他者が他我として存在するということばかりではない。むしろ私自身が感じる主体でも感じられるものでもあるということこそが熟慮されるべき謎である。なぜなら、他者の身体は私にとって感じられるものでしかなく、私の身体だけがこのような両義性を有するからである。そしてこうした私の身体の両義性を私が認識し得るのは、すでに述べたように再帰的触覚経験によってのみである。

それでは、再帰的触覚経験の謎はどこにあるのだろうか。私の右手が私の左手に触れるとき、触れている右手は決して触れられているものではないし、触れられていた左手が右手を感じ始めるとき、それはもはや触れられているものではなく、触れるものとなつてゐる。このように、触れるものと触れられるものとは、身体においては決して一致しない。触れている右手と触れられてゐる左手が合致するのではなく、両者の関係はあくまでも可逆的 (reversible) なのである。このことは、考えてみればごく当然のことではある。というのも、もしも右手と左手が同時に「触れている」という感覚を持つとしたら、両者の区別が解消されて融合してしまふだろうが、実際にはそのようなことはないからである。そこにおいて成り立っているのは、二つの身体部分の「触れる—触れられる」という対になった関係性であつて、決して両者の混同ではないのだ。

だが、この事例から我々が学ぶことができるのはそれだけではない。再帰的触覚経験における可逆性は、感じているもの自身を感じるものの不可能性をも意味しているのである。すなわち、あらゆる知覚経験において私は知覚している私自身を知覚することはできない。例えば私は見ている私を見ることはできないし、触つてゐる私に触れることもできない。言い換えれば、知覚とは知覚するものと知覚されるものが対になつて成立するものであつて、知覚するものが知覚するものを捉えるということは不可能なのである。つまり私が私を知覚しようとする際に

も、私の身体はあくまで知覚の対象として知覚され得るに過ぎず、知覚の主体である私が知覚の主体である私を知覚するという可能性は原理的にあり得ない。ということは、いまや私に就いて謎であるのは、他者が他我として存在するということがかりでなく、私が存在するということそれ自体であると言わねばならない。なぜなら私は再帰的触覚経験においても、感じる主体としての私自身を感じることはできないからである。

したがつて、再帰的触覚経験にせよ私が他者の身体に触れる場合にせよ、どちらもともに知覚されるものとして与えられるという意味において、触れている私に触れることの不可能性と、私が他者の身体を知覚する際の他者の不可知性との間には類比的な関係性が成り立っていると言うことができる。両者の違いは、再帰的触覚経験においては触れるものと触れられるものの可逆性が成り立つが、私と他者との関係においてはたとえ触覚を通じた接触によつても可逆性が成り立たないという点にのみある。「世界の肉」(La chair du monde) という概念の導入によつて、私と他者との関係を含むあらゆる領域に可逆性を認めようとするメルロ・ポンティに反して、可逆性は再帰的触覚経験のみ成立するという立場に踏みとどまるならば、私と他者との間にある隔たりは、いかなる手段によつても決して解消され得ないということが隠蔽されることはもはやない。私が身体を有しているがゆえにこそ、私を感じるものであるからこそ、私は他者を経験し得るのであるし、同時に、両者の間には決し

て乗り越えられぬ隔たりがあるとも言わねばならないのである。

## 注

- (1) Henri Wallon, *Les origines du caractère chez l'enfant*, PUF, 1949, p. 239.
- (2) この概念は、ワロンが「幼児における性格の起源」第三部「自己意識」の中で論じた「社会的社会性」(la sociabilité syncretique)に由来するものである。
- (3) フッサールも、「自我と他我とは常にそして必然的に、根源的な「対になる」という仕方では与えられる」と「デカルト的省察」の中で述べている。Edmund Husserl, *Cartesianische Meditationen*, Felix Meiner Verlag, 1995, p. 115.
- (4) Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Zweites Buch*, Martinus Nijhoff, 1952, p. 148.

## 文献

- メルロー＝ポンティの著作からの引用は、以下の略号を用いて頁数を本文中に示す。
- PP : *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945.
- PC : *Parcours 1935-1951*, Verdier, 1997, 110ページ。本論文と取り上げるのは、「幼児の対人関係」Les relations avec autrui chez l'enfant, 1951, pp. 147-229のみである。
- VI : *Le visible et l'invisible*, Gallimard, 1964.

(いししい たつや・京都大学)